

Contents

第20回日本エイズ学会学術集会 報告	1
第20回日本エイズ学会学術集会 感想文	2
Community Action for AIDS'06 参加イベントより ...	6
海外の雑誌より	7
ネストより	8
ボランティアの声 (01)	9
活動報告	10

第20回日本エイズ学会学術集会 報告 Living Together-ネットワークを広げ真の連携を創ろう

池上 千寿子

2006年11月30日ー12月2日の3日間、東京都千代田区の日本教育会館、学術総合センターの2会場で第20回日本エイズ学会学術集会・総会が開催されました。

参加登録者は1333名、他にメディア、ボランティアスタッフ、招待演者、展示等の参加者をあわせると1500名を超えるという盛況でした。

一般演題発表は310余、シンポジウム等が30を超えるというプログラム構成で、連日朝9時から夜8時までめじろ押し、熱いLT(Living Together)空間が創られました。

LTテーマにあわせていくつもの新機軸が実践されました。

1 学術集会と関連団体とのネットワークの拡大

多くの専門家団体や研究グループからプログラムの企画協力をいただき、最前線の情報をお伝えする多彩なプログラムを組むことができました。多方面から、後援だけでなくプログラムの共催・協賛・参加促進等でもご支援をいただきました。

2 科学とコミュニティのLT

記念講演では、ワクチン開発の最前線からポール・ジョンソン博士とHIV陽性者によるエイズ活動の最前線からドナルド・チュガニューエ氏のお二人をお招きしました。科学とコミュニティのLTです。

3 日本の当事者参加によるLTの実感

学会運営委員会に当事者組織から男女お二人に参加していただき、10のプログラムで当事者を交えた議論が実現されました。シンポジウム「自ら動き出したHIV陽性者たち」は当事者・支援4団体が主催した画期的なもので、このプログラムへの当事者参加を支援するために学会とは別組織で基金が集められ36名の参加が実現しました。

4 4つのスキルズビルディング講座の開催

今回の目標のひとつは「専門職仲間をふやそう」でしたが、医師、看護師、歯科医師を対象に入門講座を開催。また、若者によるエイズの取り組みを支援するためのスキルズビル

ディングには全国から51名の若者が集まりました。

5 多様な立場からの議論の場を実現

記念シンポジウムは「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」というテーマで、医療体制の構築を中心に、政策立案、行政、臨床現場、NGO、当事者、学会という多様な立場から議論することができました。専門職が一堂に会する学術集会という場の持つひとつの役割を提示できたのではないかと思います。他のプログラムでも多様な立場からの議論が活発に行われましたが、薬剤耐性について基礎医学専門家、看護職、支援者、臨床医などが語り合ったランチョンセミナーもその好例です。

6 記者会見と速報の発行

学術集会プログラムは「基礎医学」「臨床医学」「社会」という3つの柱を持ちます。そこで、初日は川名奈央子氏と長谷川博史氏(社会)、2日目は山本直樹氏(基礎)、3日目は岩本愛吉エイズ学会理事長(臨床)に記者会見をしていただき即日発行の速報でみなさまにお知らせしました。大好評でホームページにも掲載しました。

7 展示・交流ラウンジのLT演出

学術集会の緊張を解く交流ラウンジ。コミュニティのセンスとパワーが炸裂したLT空間で映像、写真、資料、展示を堪能しながらの語らいや憩い。大成功でした。

8 学術集会と連動するコミュニティプログラムの運営

学術集会は1万円という参加費が必要ですが、広くコミュニティと連動するためにCommunity Action for AIDS'06という別組織が運営され学術集会を中心とする1ヶ月間に23のイベントを組み、Living Together宣言への署名を呼びかけました。

初のNGO会長を多方面から支えてくれたみなさま本当にありがとうございました。個人から企業・学校・組織まで多くの力が結集されました。新たな絆をさらに育てていきましょう。

第20回日本エイズ学会学術集会 感想文

「Living Together～ネットワークを広げ真の連携を創ろう～」というテーマで行われた第20回エイズ学会には、従来にも増して多様な参加者がありました。今回の学会に積極的に関わっていただいた方々の中から、ごく一部ではありますが感想文をいただき掲載します。

第20回エイズ学会に参加して

～「薬剤耐性について色々な立場から考える」を終えて～

国立感染症研究所エイズ研究センター 杉浦 互
今回のエイズ学会では薬剤耐性 HIV の話題を取り上げるセミナーおよび発表を中心に参加させていただきました。薬剤耐性 HIV のセミナーの企画をプログラム委員会よりいただいたとき、今回の学会では薬剤耐性 HIV における様々な問題点を俯瞰的に捉えてみたいと考え、基礎、臨床、看護、社会学と分野の異なる方々にそれぞれの立場から薬剤耐性検査について生討論をしてもらうことにしました。当日はどれほどの方に関心を持っていただけるか心配していましたが、ランチョンセミナーであったことが幸いしたのでしょうか、多くの方に参加し聞いていただくことができ大変嬉しく思います。各発表者の先生方にはそれぞれの立場における問題提起をしていただいたのですが、時間の都合で十分に議論を深めることは出来ず、「分野を超えた連携を推し進める」という月並みな結論に落ち着いたことは、座長を務めた私の力不足であったと反省しています。それでも、異なる分野の先生方との生討論は、成程と感じる意見が多く、私にとっては大変な勉強になりました。

研究室と臨床現場は近いようで意外と遠く、HIV 感染者の方となると更に隔たり、データーの向こうにその姿は臆気にしか見えてきません。私たちは研究費等の申請書によく期待され得る成果として「HIV/AIDSの予防治療に役立つ」と書き込みますが、これは定型句であり、なかなか実感を伴ってはきません。今回のセミナーを機に「疫学調査は誰のためにやるのか」、「結果から何を学び伝えるのか」ということを改めて考え、HIV感染者の方々が「自分たちのため」と感じるような調査を進めてみたいと思い至ったのが今回の学会に参加することにより得た最大の収穫でした。市川誠一先生をはじめとするプログラム委員の先生方、主催者のぶれいす東京の方々そしてランチョンセミナーで発表してくださった生島さん、村上さん、日笠先生にはこの場を借りて御礼申し上げます。

『Living Together』～違いを超えて』

川名 奈央子

「HIV陽性者ではあるけれど、HIVにフルタイムで関わっているわけではないのに、今回の日本エイズ学会のPLWHAリエゾンです、なんて言っているのかなあ」。

そんな気持ちを抱きつつ、初めて日本エイズ学会に参加した私。1日目は池上さんと一緒にプレス・ブリーフィングに出て、そのあと、『AIDS has a woman's face』にスピーカーとして参加。残りの日程は自分の興味のある演題発表や講演、シンポジウムを聴いた。スカラシップがあったこともあり、陽性者がたくさん参加してうれしかったけど、「陽性者の視点を全く考慮に入れていない」、「その研究ってサービス提供者側の思い込みでは？」などと憤りを感じるこ

とも多く、同じこと(=HIV)に取り組んでいるといってもいろいろな人がいるんだなああとショックを受けた。

ショックを抱えたまま乗り込んだ帰りの新幹線。3日の間に自分の頭や心にあふれた知識や気持ちを整理しているとき、なぜか突然、『Living Together』ってそういうことだったのか、私も自分なりにやっていけばいいんだな、とストンと思えた。みんなが一緒に生きている。それは当たり前に見えるけど、実はとても積極的な意味を持つことばだ。HIVを持っているかいないかだけでなく、立場や考え方がさまざまな人たちが一緒に生きていくということは、違いを認め、お互いを尊重することで初めて可能なことから。また、そんななかで、私自身が100%である必要はない。私のできることは数パーセントだけど、数パーセントの違った何かを持つ人たちと力を合わせて100%に近づけていけばいい。そして、どんなに小さなパーセンテージでもそれぞれの果たす役割には価値がある。

私は私なりにこれからも HIV に関わっていく。いろんな人たちと一緒に。言葉にするとシンプルだけど、そんな思いを新たにしたいエイズ学会だった。

記念シンポジウム

「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」

葛飾区保健所 城所 敏英

第20回エイズ学会で特筆すべきことは、会長に今までの医療関係者にかわって、はじめてコミュニティでの活動家の池上千寿子さんがなったこと（ぶれいす東京のNewsLetterに書いて



記念シンポジウム「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」

ているからではなくて)。その目玉の一つがこの記念シンポジウムで、エイズ対策について学会として行動を起こしていく取り組みの開始だと思えます。シンポジウムの概要は「エイズ学会速報第2号」に宮田一雄さんが書いているので、学会HPで見てください。

6人のシンポジストが発言されましたが、私の興味はその一人伊藤雅治氏でした。氏は、昭和62年にエイズ対策大綱がつけられた当時の結核感染症対策室長で(当時の厚生省では感染症対策が課ではなく室扱いだった!)、国のエイズ対策は薬害から始まったこと、治療法のない感染症に対する政府や社会の認識が不十分であったこと、一方でカウンセリングについての国際的な動向を担当者としては認識していたことなどを述べられました。その後の国の取り組みは薬害裁判一原告団への対応が中心になりましたが、それを政策立案者と当事者の協働の始まりと表現していました。平成17年のエイズ予防指針が、HIV感染症がコントロール可能な一般的

な病となってきているという認識の下で見直されたということとは時代の変化を示していると思います。

中長期戦略を求めたわたしとしてはちょっと物足りませんでしたが、エイズ学会として取り組みを開始したことと、当事者の参画を基調にすることが確認されたことは大きな成果だと思いました。来年の広島にどう引き継がれるか期待します。

「Living Together

～共に生きるパートナーとしての抗 HIV 薬～

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科

栗原 健

今回の学会は、特に熱気を感じた学会でした。それぞれの会場では朝早くから夜遅くまで、熱心な討論が行われていました。討論を聞いていて、一昨年のエイズ学会を思い出しました。新しく登場した1日1回タイプの抗 HIV 薬の使い方や副作用などについて、様々な質問のあったことが昨日のように思い出されました。1日1回タイプの新薬が登場し、約2～3年が過ぎた今回の学会では、多くの医師や薬剤師から、豊富な使用経験の結果や注意すべき副作用などについて報告がありました。また今年の学会では、近い将来登場するであろうと期待されている新薬(薬剤耐性をもった患者さんにも効果が期待されるプロテアーゼ阻害剤や、これまでの抗 HIV 薬とは異なる作用機序を持ったインテグラーゼ阻害剤など)の紹介もありました。

1990年代から2000年頃に開発された抗 HIV 薬は、ウイルスの増殖を抑えこむことを、命を救うことを第一に考え、開発のスピードを加速させました。そのために、のみやすさや副作用などは犠牲にされてきました。最近登場した抗 HIV 薬は、のみやすさや副作用などの軽減が図られてきてはいますが、まだまだ多くの人々にとって、十分なものとは言えないと思います。－ Living Together － 共に生きるパートナーとして抗 HIV 薬は、まだまだ十分とは言えませんが、少しずつ、少しずつ、確実に前進しているような、そんな実感を持つことができた学会でした。

「感染告知から 20 年、3 度目のエイズ学会に参加して」

川田 龍平

今回のエイズ会議では、初めて「予防啓発」をテーマにしたセッションで座長を務め、「ユースのためのスキルズビルディング」でも、とても良い経験をさせていただきました。ご協力頂いたみなさん、どうもありがとうございました。

自分の身体のことでもあり、個人的には、エイズについて「治療」の面には関心がありました。「予防」について関心に向いたのは、治療が落ち着き、大学で、若い学生たちが「薬害」だけでなく、性や性感染症としての HIV/AIDS も知らないことに驚いたからです。

「薬害エイズ」がなぜ防げなかったのか。前々回の静岡のエイズ学会から、初めて社会的な視点で「薬害」が取り上げられて、熊本でも引き継がれました。東京では被害者の報告がありましたが、根本的な原因に触れていかないと、「性感染」としての「予防」についても、同じ過ちを犯しています。単に「エイズ」を病としての研究対象とするのではなく、「人」を主体に考えていくことが大切だと思うのです。

ブラジルのアラウージョさんの報告から、在日外国人を国

籍やビザの有無で差別することなく、治療していく必要性を学びました。また、ユースのセッションでは、大人が真剣に身体をはって、子どもたちを守らなければいけないこと。そして、ユースは「子ども扱い」ではなく、一人の人間として尊重していく大事さを痛感しました。

エイズ学会参加感想「セクシャルヘルス支援のあり方～ポジティブな SEX LIFE に向けて～」

北海道大学病院 大野 稔子

私は、HIV 担当看護師を兼任してから 10 年になります。セクシャルヘルスへの支援の難しさを感じています。今回参加した「HIV 感染者のセクシャルヘルス支援のあり方」のシンポジウムのシンポジスト高橋先生が「セクシャリティ(性)は暮らしの一部であり、性を大切にすることは、その人らしい暮らしを大切にすることの一部である」と話をされていた。私も同じように思い、性に関する相談の場を積極的に設けてきました。病院では受診の際、患者さんの話を聴いて今までの性行為を振り返りリスク行為を確認し、患者さんが具体的な感染予防行動を考えていけるよう関わっています。しかし、通院患者さんが梅毒や B 型肝炎になり受診される時があり、「あんなに話をして、セーファーセックスを具体的に考えたのに…」と看護師として挫折感を感じ「人が行動を変化させることや継続していく難しさ」を考えさせられます。また、「HIV 感染しているから今後 SEX はできないね」と医療者に言われた経験がトラウマになり数年が経過した今も悩んでいる患者さんの話などから、医療者へのセクシャルヘルス教育が必要だと思います。看護師や医師など多くの医療者は、セクシャルヘルスへの支援として教育や研修を受ける機会はほとんどなく、私自身もスキルや知識の足りなさを痛感しています。

「眼の前にいるその人が何を必要としているか」を考え、「必要な支援になっているのか」を評価し、その人に満足していただける支援とは何かを考えさせられるシンポジウムでした。1月に東京でセクシャルヘルスの研修会が開催されるという案内もありましたので、知識やスキルを習得して、自分のかかわりを振り返る機会にして今後につなげていきたいと考えています。

「エイズ学会を振り返り～地域連携における開業歯科医の参画について～」

東京都歯科医師会エイズ協力歯科診療所運営協議会委員

中田 たか志

今回の学会では、東京都の委託事業で東京都歯科医師会が運営している「東京都エイズ協力歯科診療所紹介事業」の、協力歯科診療所に登録されている先生方を中心にシンポジウムを持たせていただきました。過去のエイズ学会での歯科系の参加では、厚生労働省の研修班による発表か、拠点病院歯科・口腔外科の発表が中心でしたが、今回最も患者さんに身近な歯科診療の担い手であるべき、開業歯科医師のグループであり、スタディーグループとも違う、地域医療の中心的な役割を担う、歯科医師会の枠組みの中で参加できたことに意義深いものを感じました。

私は「AIDS 新時代における歯科診療を取り巻く諸問題について」というシンポジウムの中で、「歯科医師の HIV 陽性者診療に対する意識」という演題で発表させていただきました。

歯科医療はその80%以上が診療所勤務の歯科医師によってなされています。病院勤務が60%以上を占める医療と、大きく異なる状況です。ということは、HIV歯科診療においても、その担い手は開業歯科医師であるはずで、しかし現状ではHIV陽性者診療を受け入れる診療所は非常に少なく、東京都では約0.5%しかありません。私のところにも、HIV感染者を「見破る方法」を問い合わせる歯科医師も沢山います。歯科医師が気が付こうが気が付くまいが、患者が自己申告しようがしまいが、感染者は私達と共にこの地球で生活していて、歯科診療を求めている。その事実が重要であり、その現実気が付けば、自ずと成さねばならない方向が見えてくるように思います。

疾病関係の学会の中で医療従事者・疾病研究者以外の参加がこれだけ居る学会も他にはありません。今回の学会の総合テーマである「Living Together—ネットワークを広げ真の連携を創ろう」その連携の中に「開業歯科医」が今以上に参画していく事に、今回の学会が与えた影響が大きいと確信しています。

「これまでの成果に力をもらい、そしてこれからへ」

柏木 薫

スカラシップをいただいたので、休みをとって、学会に参加させてもらいました。日程表をチェックすると、陽性者が中心になったプログラムがたくさん組まれていてびっくり。ただ、同じ時間に興味を引かれるものもいくつもありすぎて。でも、どれか選ばなければならぬですね。専門職のためだけではないシンポジウムがこれだけ増えたのだし、それ専用の部屋をひとつ設けてもらって、そこで一日中開催してもらえたら、と思ってしまいました。

シンポジウムはどれも大盛況だったうえ、参加者もみんな熱心で、その熱気がひしひしと伝わってきました。そこでは陽性者が前面に出て、生き生きと、しかもごく自然に、自分の言葉で語っていて、新しい時代に突入したんだという感慨を持ったのは、僕だけではなかったと思います。とくに、それぞれの立場の違いに対応しつつ、それぞれのやり方で活動されてきたこと、それによって社会への訴えかけを行っている姿は、とても素敵で、同じ陽性者として誇らしい気持ちにさせてもらえました。もちろんそれは、これまで一歩一歩進んできたことが結実したのですが、その過程では、さまざまな困難に直面したであろうことは想像に難しく、よくぞここまで、がんばってきたんだあ、という思いで胸がいっぱいになりました。帰宅すると「そんなに、ウキウキしてどうしたの」と指摘されたのですが、この言葉こそ、今回の学会が与えてくれたものを、良くあらわしているのではないかと思います。

「エイズ学会を振り返って」

東京福祉大学社会福祉学部 山本 博之

今年のエイズ学会のテーマでもある“真の連携”にふさわしく、さまざまな角度から連携をテーマにした発表があったように感じます。学会初日、午後6時よりサテライトシンポジウム「地域における長期療養患者支援の課題」も地域内のさまざまなサービスの連携についてのシンポジウムでした。

シンポジウムは関西学院大学の小西加保留さんの研究成果発表に続き、長期療養患者の地域支援の経験を持つソーシャ

ルワーカー、介護職、ケアマネージャー、医師らによる報告、そしてフロアとの意見交換という内容でした。会場でもコメントしましたが、本シンポジウムの一番の特徴は介護職、ケアマネージャーの発表があったことではないかと思いません。今まで HIV 患者感染者への心理社会的支援者はカウンセラーやソーシャルワーカーといった職種が主でした。しかしながら慢性疾患としての HIV 感染症といった性格が強まることにより、新たな課題として、地域における高齢者やしょうがい者としての HIV 感染者支援という問題が取り上げられるようになったのでしょうか。

今回のシンポジウムでは、小西さんと私の間である一致事項がありました。それは“会場の人々がこのシンポジウムへ出席することによって、カづけられ、ポジティブにこの問題を考えてもらえるような内容にしたい”ということでした。そのため、ディスカッションの時間を多くとり、フロアからの発言を重要視した結果、多くの私たちの期待と一致する評価を受けることができたと感じています。出席された方も連携の必要性について再度確認されたことと思います。

「第20回日本エイズ学会総会で生まれた変化は？」

名古屋市立大学看護学部 市川 誠一

市民公開講座「なぜ男性同性間で HIV 感染は増えたか」は、エイズ学会主催で初めてMSM(男性とセックスする男性)の HIV 感染をテーマにしたシンポジウムでした。HIV/AIDS報告数が増え続けてきたわが国で、なぜかこれまでに学会主催のシンポジウムにこのテーマは取り上げられることがありませんでした。MSMについてはサテライトシンポジウムでのみ行ってきたため、今回このテーマで市民公開講座として開催されたことは学会としても大きな前進と(勝手に)思っています。

また、HIV陽性者の学会参加が促進され、一般演題やシンポジウムにも HIV 陽性者からのコメントがあり、いつもの研究発表とは異なった雰囲気であったように思います。私が主催したサテライトシンポジウム「ゲイ男性の生育歴と HIV 予防」でも HIV 陽性者からの発言がありました。研究発表の意義もさることながら、HIV陽性者を含めた男性同性愛者の生育過程とメンタルヘルスについての質的な調査も必要であると感じました。

東京での開催、さらにNPO代表が学会長であったことがこのような変化をもたらしたことは間違いありません。こうした変化を持続していくためには、今回関わった多くの方が他の地域で開催される学術総会にもこの変化をもたらしていく必要があると感じています。

今年の日本エイズ学会総会、楽しかったです。

まさに Living Together でした。

「来んさい。必ず広島に来んさい！」

第21回日本エイズ学会学術集会・会長

広島大学病院 輸血部 高田 昇

自慢じゃありませんが、私は第1回のエイズ研究会の時から、全部出席しています(…自慢してる!)。そして2004年までは毎回自分自身で演題発表をしてきましたし、会場で積極的に質問やコメントをしていました(またまた…)。ところが、今回は私が関与した一部の発表を除いて会場に行くことはありませんでした。

だって来年は学会長でしょ! それどころじゃありません

ん。学会長ってどこで、何をしていればいいのか気になって、結局、学会本部で池上会長のそばにいました。どんな時間帯にどんなことが発生して、本部はどんな対応をしないといけないのだろうか、と。たまに会場に行けば、内容よりも会場の広さと人の入りばかり気になりました。



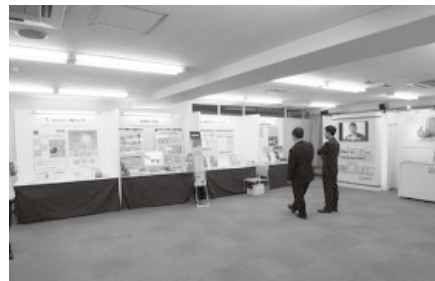
学会事務局の様子。次期会長の高田氏の顔も…

想像通り事務局長の生島さんは本部を出ていったきりで、めったに帰ってきませんでした。本部にはマスコミ関係者が、色んな時間帯に訪ねてきます。名刺を貰いながら取材上のお願いなど、樽井先生と根岸先生が愛想良く対応していました。池上会長は、あまりソワソワした様子はなく、むしろ悠然としていたように見えました。

学術集会はイベントです。参加料を頂きます。ですから参加者が多ければ収入も増える、少なかったら赤字。有料入場者数が何人かになるところで、バランスシートが赤から黒になるところがあります。学会本部は受付から入ってくる数字に一喜一憂して、最後にニッコリでした。来年はどうなるか。

ところで来年の学術集会はメインテーマを「Step Up 情報・教育」としました。会期は2007年11月28～30日、会場は平和記念公園の中にある広島国際会議場です。広島のレストランは少し早く閉まりますので、毎日のプログラムは午後7時までには終わるよう努めます。この時期、広島は牡蠣の季節です。お酒が好きな方には清酒、そしてお好み焼きが待っとるけんね。「来んさい。必ず広島に来んさい！」(こう書きながら、7時からみ出しそうです。ヤレヤレ。)

第21回日本エイズ学会学術集会・総会ホームページ
<http://jaids21.umin.jp/index.html>



左上：会長講演をする池上代表
 左下：あるセッション会場の様子
 右上：左から樽井正義さん、GNP+ (国際HIV陽性者ネットワーク) の創始者 Don de Gagne さん、池上代表
 右下：ブース展示場



左：学会2日目の記者会見。
 左から根岸昌功さん、プログラム委員長の山本直樹さん、池上代表
 右：毎日発行された「日本エイズ学会速報」



交流ラウンジ。大阪のコミュニティイベントPLuS+で生まれた、HIV陽性者やその周辺の人たちのメッセージ「十＝〇」が展示された。また、ビデオにて“The Other Side of PEOPLE + S”が上映された。

Community Action for AIDS'06 参加イベントより

HIV/AIDSが自分たちの問題であることへの気づきに向けて動き始めたさまざまなアクションをつなぐキャンペーン。11月16日から12月22日の間にさまざまなイベントが開催されました。また、Community Action for AIDS'06のウェブサイトでは「Living Together 宣言」のウェブ上での署名が行われ、多くの人が署名しコメントを寄せています。

期間中に、クラブイベント、写真展、コンサートなど、大小さまざまな23のイベントが開催されました。参加イベントに携わった方の中から3名の感想／報告文をお届けします。

「Community Action for AIDS'06に参加して」

協働フォーラムメンバー

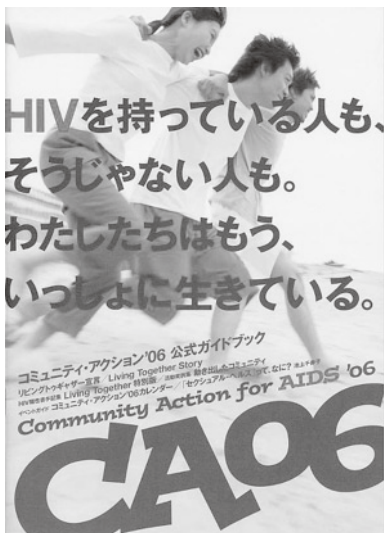
化学エネルギー鉱山労働組合協議会 (ICEM・JAF)

茂木 祥子

労働組合とNGOで構成される「NGO-労働組合国際協働フォーラム」は、CA06の参加イベントとして、連合（日本労働組合総連合会）が本部を置く総評会館1Fロビーで11日間の写真パネル展を催しました。展示したのは、写真家・菊池修さんが「エイズという透視図」というテーマで選んだ写真6点と、同フォーラムのメンバーであるシェア＝国際保健協力市民の会による海外活動現場風景十数点。確保できたのはロビー一角のわずか7畳ほどの狭小スペース。会場としてはありえない環境と条件の中で、菊池さんも、シェアさんも、目から鱗の知恵とセンスでそのハンデを打ち破ってくださいました。とにもかくにも、このビルに出入りする人たち、特に職場問題のプロである労働組合関係者の目にとまることを意識して実施した写真パネル展でした。

写真展が終了したところでLiving Together 宣言に賛同の署名をしました。We are all People Living with HIV/AIDS. Living together...誰と誰が？の質問の答えが、「HIVが体に「ある」ワタシと「ない」アナタ」ではいやなのです。HIVとともに生きている人が暮らすこのたった一つの世界で暮らしているのは、アナタもワタシも同じこと。

Living together、そしてWorking Togetherを宣言します。



Community Action for AIDS'06の公式ガイドブック。「Living Together」とは何か、これを見ればよく分かる。

「Living Togetherのメッセージを楽しく真面目に届けたい！～ライブイベント「We're!」

「We're!」共同代表 kkjk (カケジク)

普段している音楽活動と、「やりたい」と思っているHIV/AIDSの予防啓発活動をなんとか密接に出来ないのか…と2005年から考えていて、まずはライブイベントを！と「We're!」を企画しました。

音楽活動を通して仲良くなった人達に声をかけたりして、ミュージシャン・パフォーマー・DJなど総勢12組に出演してもらいました。ジャンルも表現方法もバラバラ。アイドルもロックも弾き語りも演歌も！そんな「ごちゃごちゃ感」が、それぞれ思い思いにActionを起こす「Community Action for AIDS'06」と通ずる部分かな…なんて。

当日はどうなる事かととても不安でしたが、蓋を開けてみたら、来て下さった皆さんが楽しそうに観て下さっていてホンマに嬉しかったです。

大事なのは「続けていく事」。これからも色々な形で「楽しく真面目に」Actionを起こして行きたいと思っています。

「LIVING TOGETHER コンサート&研究成果発表会」

生島 嗣

第20回日本エイズ学会の最終日12月2日の夕刻。学術総合センター 一ツ橋記念講堂にてコンサートが開幕しました。このコンサートは2年間にわたり、新宿2丁目のクラブにて、毎月開催されてきたLIVING TOGETHER LOUNGEを、ホールで再構成するという新たな試みでした。

はじめに、池上千寿子、兵藤智佳よりLIVING TOGETHERという啓発がどのような効果を期待できるものかの解説があり、その後、演奏と朗読が続きました。

まずは、aktaスタッフの荒木順子さん、俳優の東じゅんぺいさんの朗読です。その後、夏のパレードでも歌ってくれたAWAさんがギターのサンノヘシゲカズさんとともに登場。東さんの朗読、AWAさんの演奏の一部はNHKニュースでも放映されました。そして、ぶんさん(新宿2丁目 groovys bar)、ヨシアキさんが、朗読とコメントを話してくれました。最後には、数々のアーティストにもフィーチャリングされる実力派ソウル・シンガーBOOさん (feat. SWING-O)の登場です。最後は聴衆も一緒に手拍子をうちつつエンディング。張由紀夫さんの挨拶で閉幕しました。

来場者からは、「バトンをもらいました」「このような手法がいろんな場所に広がってほしいな」「五官を使うのは大切だと思いました」「朗読者ひとりひとりの言葉がこころにひびきました」「朗読者として参加したい」などのメッセージがありました。(アンケートより)

最後に、設備が十分でない会場での開催を可能にしたのは、スタッフの貢献によるものであることを書き添えたい。



学会の最終日に行われた「Living Together Concert」はNHKニュースでも紹介された

海外の雑誌より

Positive Nation 2005年8月号 HIV陽性の医療従事者へのインタビュー

翻訳ボランティアの協力による海外の雑誌記事のご紹介の第二弾です。前回に引き続きイギリスの雑誌「Positive Nation」に掲載された記事をご紹介します。「Positive Nation」は、イギリスの非営利団体：UK Coalition of People Living with HIV and AIDSによって発行されています。

今度病院に行ったら、ぜひそこで働いている看護師や医師たちについても考えてほしい。慢性疾患に理解ある人々に囲まれているはずの医療従事者たちが、職場では自らがHIV陽性であることを打ち明けるのを恐れるのは何故なのだろう。以下、Marcel Wiel氏による、イギリスで働くHIV陽性の医療従事者達へのインタビュー記事より要約。

自らが患者になることで「立場が変わった」とみなされたり、医学分野は非常に競争が激しくキャリア指向が強いため、「病気は弱点」とみなされてしまうことを恐れると、ある医師は言う。最近の米国で発表された医師に関する研究では、職場でHIVを隠し続けることは、セーフセックスについて悩んだり、アドヒアランスが保てない、薬物やアルコール依存になりやすいなどといった結果を招くとされている。

Richard Peters氏 (HIV研究の分野で働く医師／29才)

研究対象としている人々に対して「過度に感情的に流されている」と思われることを恐れるため、最も親しい同僚にしか打ち明けていない。そのため、職場の近くでは診察を受けることが難しくなってしまった。

Peter Arlidge氏

(HIV中核的研究機関で働く顧問医師／45才)

彼の専門領域では人材が不足しているため、HIV陽性であることを職場で公表したがキャリアに影響があったとは考えていない。ただ、上司が守秘義務に違反したことがあり、追及しようとしたが、そもそも職場における個人情報に関する指針がないことに気付いた。「HIVのケアを提供する職場で指針がないというのはすごい皮肉です」と語る。

Christopher Collister氏 (HIV専門看護師／29才)

以前に同僚達がHIV陽性者には関わりたくないと言っているのを耳にしてショックを受けたことがある。職場で公表している今になってみると、医療従事者だからこその知る知りすぎていてがんじがらめになり、周囲の偏見を過度に意識して、どうしたら良いのかわからない状態だったと振り返る。

Jennifer Cowan氏

(南アフリカ出身の訪問看護師／41才)

結核とHIVが同時にわかり、8ヶ月仕事を病欠した。職業保健組合は復職を後押ししてくれていたが、職場では同僚が彼女の病気について上司に漏洩していて、復帰してみると通常の3倍の業務が割り当てられているという「肩たたき」をされた。抗議したいと思っているが、心配で相談することもできなかったと言う。

Gerald Nothwick氏

(一般開業医のホームドクター／41才)

病気による休職をした後、仕事に復帰すること自体が難しく感じている。「開業医としてのキャリアは、陽性だって

分かってしまったらおしまいです。診療所も雇ってくれないし、患者も離れていくでしょう」と語る。

Dean Butler氏 (HIV専門の訪問看護師／35才)

「私はHIVに精通していますから、この分野で働いていきたい」と考えたが、同時に、自分自身のHIVのケアは同僚によって提供されるということに気付いた。彼は上司に相談をし、そのHIVケアチームで初めて公表した医療従事者となった。上司は、全ての関係者にとっての良い勉強の機会と受け止め、彼の公表を信頼の証として歓迎した。彼が職務上制限をされたのは、患者と体液が接触する可能性のある、助産に関する一部の医療行為のみであった。

ICW (女性HIV陽性者の国際ネットワーク) 会長のAlice Wellborn医師は、保健医療システム自体が改善される必要があり、たとえ陽性になっても職が危うくなるようなことがあってはならないと主張する。むしろ、当事者として貴重な見識を持つ陽性者が積極的に採用されるべきで、そういった動きは様々な分野で働く人々に重要なメッセージを発信することになると考えている。

ACAS (イギリスの労働問題の調停支援機関) は、「現職員や新入職員へのHIV抗体検査を行う有益性はないし、正当性もない」と述べており、HIV陽性であることを理由に不当な差別を受けた場合には、障害者差別禁止法に基づいて改善を要求することができるとしている。しかし、包括的なHIV啓発と教育が必要であるといった見解は示されていない。また、NHS (イギリスの国民保険サービス) は、組織全体のHIVに関する状況や、それに伴う問題が起きていることを率直に認めていない。

(翻訳ボランティア：千葉 淳子、中住 純也／要約：矢島 嵩)



Positive Nation 2005年8月号より



Positive Nation 2005年8月号
2名のHIV陽性の医療従事者が表紙をかざっている。

ネストより

さまざまなネストの活動の中から、女性陽性者の集まりであるWomen's Salonの第3回目「川名奈央子さんと話そう」、恒例の「ネスト年末パーティ」の参加者感想文をお届けします。

■第3回 Women's Salon 「川名奈央子さんと話そう」

APN+（アジアパシフィック地域のHIV陽性者ネットワーク）の共同代表で、ジャンププラスの国際担当である川名さんは、実は東京から遠く離れた地方に住んでいて、民間企業に勤め、今春中学に入る娘さんの成長に一喜一憂しながら“幸か不幸かまわってきたPTA役員”を必死でこなしつつ、自分らしく自然体で過ごしている方です。

そんな川名さんを招いて、10月15日（日）の午後に第3回目のWomen's Salonが開催されました。9名の参加者のうち、7名が始めての方で、会がお開きになったあとも話がつきない様子に、女性が安心して話せる場の大切さを感じました。（はらだ）

川名さんのWomen's Salonに参加したのは、ちょうど告知から1ヶ月半の頃でした。これほどの重大な病気に罹っているが誰にも告げられず、何より、本当はすぐに死んでしまうのでは。という疑いを消し去ることができませんでした。川名さんのWomen's Salonは、お茶を飲みながら楽しく歓談しましょう！という趣旨だったかと思うのですがそういうわけで、発言のたびに泣いてしまい、すみません。ですが同時に、初めてお会いする自分以外の感染者の方々が、様々な悩みを抱えながらも真剣に生きようとする姿も拝見しました。福岡であんな風に他の感染者の方々と心から話ができる機会があるのか分かりませんが、川名さんや参加者の方々が今もこの時間をごんばって生きていると思うから、私も大丈夫、頑張れます。本当に有難うございました。（yoko778）

病気に関して情報の少ない地方の町で一人の娘さんを育てるお母さんとして生活する傍ら、自ら病気を受け入れることにとどまらず国際会議において陽性者として積極的に活動されている奈央子さんの行動力には感心してしまいました。多くの苦難を乗り越えてきた強さ、たくさんの引き出しを持ちながら物事に等身大で取り組んでおられる姿が実に魅力的な人だ。お話の中で、「活動をしていくにつれ、周囲にも少しずつ病気のことを言えるようになって楽になった」とおっしゃったことが強く印象に残っている。改めて社会にこの病気の実態を伝えていくことの大切さを感じ、陽性者としての自分が出来ることを模索しながら、いつか私も「言える自分」になりたいと思った。

普段なかなか女性の陽性者同士が知り合う機会に恵まれないのだが、今回の参加者は全員初対面で10人くらい集まった。告知後間もない方、地方にお住まいの方、出産を経験された方、パートナーの死を乗り越えた方など、いろいろな方に一度にお会いできて充実したよい時間を過ごすことができた。抱える問題は様々だが、どれをとっても自分と無関係のものではなく、思いを共感し合えたことをとても嬉しく思っている。途中涙の場面もあったが最後は皆が少しずつ勇気と希望を持ち帰ったのではないかと思う。病気は私たちが容赦なく苦しめるけれど同時に私たちに物事の本質を教えてくれ、素晴らしい出会いを運んでくれている。おかしいけれど時々病

気に感謝したくなる。

奈央子さん、参加者の皆さん、ありがとうございました。またお会いできるのを楽しみにしています。（たみ）

■ネスト年末パーティ

恒例となりましたネスト年末パーティが12月17日（日）に参加者・スタッフ合わせて32名で開催されました。参加者からの感想文をお届けします。

今回はじめて年末パーティに参加させていただきました。ネストにお邪魔したのも初めてでしたので、どんな雰囲気か、どんな方がいらっしゃるのか、皆さんが相手をしてくれるのかと、内心ドキドキしていました。パーティが始まり、皆さん楽しく話をされていて和気あいあいの雰囲気で、初顔の私にも皆さんから気さくに声をかけてくださりました。服や、アクセサリの話だけでなく、病気のことで困ったこと、服薬や、病院での話など、今まで心に閉じ込めていたことを、皆さんと明るく、楽しく話ができ、心からのびのびとした気分になることができました。

また、軽食ありとの案内でしたが、お手製のサラダ、おにぎりの他、デザートケーキまで用意されていて、もうびっくり！おいしくいただきました。おなかも大満足でした。今まで一人で陰にこもる事もありましたが、初めてこんなにたくさん（二十数名）の陽性の方にお会いして、自分は一人じゃないんだ、ここならみんなに力をもらえるんだ、と自分の居場所を見つけたような気がしました。このようなイベントに次回も参加したいし、ふいに時間が空いたときも、ネストに足を運びたいと思いました。皆さんこれからもよろしくお願いします。（ペンネーム：オーバークロック 30代）

ネストには、本当にお世話になっている。昨年5月にHIV（+）と発覚し、仲間やスタッフの方々には、随分精神的にフォローしていただき感謝している。11月から投薬が始まり、それからは、尚更である。そんな新人が、初めて年末パーティに参加させていただいた。楽しかった！！「ああ、疾患や生活で悩んでいるのは、自分だけじゃないんだ…」と実感。

なんか、人に言いづらい病名。それぞれの人が、いろんな問題や「生きづらさ」を抱えている。でも、此处に来ると、わりと正直に分かち合う事ができる。HIVが発覚して、一時は、自殺も考えちゃって…やけっぱちになった事もあったし。

だけど、ネストに来てからは、悪いことばかりじゃなかった。遠方から来てくれた仲間もいたし。女性や、ミドルの方々との交流もできるし。性別やセクシャリティを問わない、共通した問題を抱えた者同士、みんなで分かち合おうぜっ！

（超大型新人 けん）



ネストの利用者が中心になって飾り付けをしてくれたクリスマスツリー

ボランティアの声(01)

あまり掲載することのなかったボランティアの皆さんの声を随時お届けすることになりました。今回はホットライン、バディ部門から4名の新人/ベテランボランティアのメッセージです。

■ホットライン部門より

「聴く事、伝える事」

ブルメリア

電話相談を始めて早数年たちました。振り返れば、新人の頃受話器を取るたびにドキドキし、言葉も思う事が口から出さずいつも反省ばかりでした。

いつの頃からでしょう。気がつけば落ち着いて話せる様になり、お守り代わりに持ち歩いていた資料もノート一冊になっていました。不安を抱く人達を受話器の向こう側にし、聴く立場の私が一番不安を抱いていたのかもしれませんが。難問にぶつかるたびに、解決の道を探す方法—自分の苦手とする事をチェックする、忘れがちなフレーズを繰り返し覚え、解らない事は解る人に聞く—を工夫して続けてきました。

そして又、精神的にも体力的にも無理はしない、身構えず自然体でいられる自分でありたいと思うのです。時には腹立たしい内容のものもあるのですが、受話器を置いてから深呼吸して、相手とオシャベリする事で不思議と心が軽くなっていきます。内容の振り返りが、心をほぐす事に役にたっているのですね。

これからもスタッフの皆さんと顔を合わせ会話をしながら、良い呼吸をしながら受話器を取っていきこうと思います。

「ホットラインの新人として」

おーた

いったい僕には何が出来るだろう？部門別研修が終わろうとしている今、改めて思う。

研修担当の佐藤さん達に指導して貰いながら、実際の相談対応する。僕の不用意な言葉が、驚く程に相手に取り込まれてしまう。あるいは『届く』と信じて渡した言葉が、見事なまでに門前払いされたり。

声だけで何かを伝える事が、こんなにも難しいとは思わなかった。いや、頭では分かっていたつもりだ。表情も、仕草も見えない中で「何かを伝える」など困難な筈だと。けれど……実際に体感すると想像よりも、ずっとずっと苦しい。もどかしい。

「安心しました。ありがとう」そう言われる事で浮かび上がる自信は、「わかりました」と納得しきれていない様子で切れる会話によって消えてゆく。そして、対応が僕でなければ、伝わったのかも知れないという思いは消えない。

なんだか苦しいけれど、それを乗り越えただろう先輩方が、研修や忘年会でかけてくれた笑顔と言葉は優しく暖かい。

僕もそこに辿り着けるだろうか。

■バディ部門より

「バディ活動をはじめて」

ナカズミ

ぶれいすで研修を受けはじめてから約1年、バディ活動を始めてからは半年以上が経つところです。暑い夏の日に活動を開始した当時は、訪問先へと向かう途中で何を話そう

か、どの話題から始めたら話が広がっていきやすいかな、と考えながら会話が続くか心配だったりしていました。最近はお互い少しずつこちなさもなくなってきたかなあ…と多少の実感と期待を持ちつつ訪問を続けています。心地よい距離感はあるけれど、どんな関係においてもきつと最初は暗中模索するものなのかなと感じるのですが、バディスタッフとして定期的にクライアントの方と接する中で、また新しい人との関わりあいのかたちを発見しているのかなと思います。活動にあたり、最初はクライアントの方との関わり方ばかりが気になっていましたが、自分のコンディションを整えた上での訪問ができるように、セルフケアは大事だと思い最近ばかりは心がけています。

毎月のミーティングには数回しか参加できていませんが、先輩スタッフの方々の話を聞いて、活動を続けていくことがまずは大事だと改めて認識しています。まだまだ始めたばかり、ゆっくりペースで継続して長く活動に参加していければと思います。

「バディ3年目にあたり」

木村 恭子

バディの活動に参加し始めて、既に2年以上が経過した。この間ずっと、同じひとりのクライアントの自宅を、月に1回の頻度で訪問している。初めての訪問の時はさすがに緊張し、「うまく会話できるだろうか？」などと心配したが、今は、当たり前のように毎月訪問しては、「また来月お伺いします」とお暇するようになっていく。

以前、仕事としてホームヘルパーをしていた影響か、当初は「何か満足してもらえることをやり遂げなければ」といった気構えがあったように思う。だが、バディの活動について改めて考えた時、そもそも自分で望んで始めたことであり、クライアントと一緒に楽しむようにすればまずはよいのだと思い、それ以降は訪問が特別なことではなく日常のことになったというか、垣根をひとつ越えられた気がする。

今後、逆に馴れきってしまわない為にも、「何故バディの活動に参加しているのか」を時々振り返ってみようと思う。きっと、常に新たな気付きがあるだろう。



ホットライン部門の忘年会

活動報告他(2006年10~12月)

— 各部門より —

ホットライン

エイズ電話相談 (ふれいす東京および東京都委託)

◆ホットライン・ミーティング他活動状況 () 内は出席人数

- 10月** 1日 HL部門オリエンテーション (研修生6名)
 5日 HL部門オリエンテーション予備日 (研修生1名)
 8日 HL部門オリエンテーション予備日 (研修生2名)
 13日 東京都電話相談連絡会 (3名)
 15日 世話人会 (4名) スタッフミーティング (17名) 第9回マニュアルミーティング (6名) HL新人研修内容打ち合わせ (有志4名)
 23日 東京都ボランティア講習会 (5名+研修生2名)
 26日 HL新人研修内容打ち合わせ (有志3名)
 29日 HL部門 部門別研修 第1日 (7名+研修生11名)
- 11月** 5日 HL部門 部門別研修 第2日 (7名+研修生8名)
 10日 東京都電話相談連絡会 (2名)
 26日 世話人会 (5名) スタッフミーティング (13名+研修生5名) 有志昼食会 (12名+研修生5名) 第10回マニュアルミーティング (4名)
- 12月** 7日 平日フォロースタッフミーティング (5名)
 8日 東京都電話相談連絡会 (2名)
 23日 スタッフミーティング/忘年会 (14名+研修生5名)

◆相談実績報告

— ふれいす東京エイズ電話相談 —

	10月	11月	12月
日数(日)	5	4	4
総時間(時間)	20	16	16
相談員数(のべ)	6.5	5.5	4.5
相談件数(件)	34	40	30
うち(男性)	30	36	24
(女性)	4	4	6
(不明)	0	0	0
(陽性者)	1	0	2
1日平均(件)	6.8	10.0	7.5

— 東京都夜間・休日エイズ電話相談 (委託) —

	10月	11月	12月
日数(日)	13	12	9
総時間(時間)	39	36	27
相談員数(のべ)	30.5	30.5	23.5
相談件数(件)	219	240	175
うち(男性)	192	204	155
(女性)	27	36	19
(不明)	0	0	0
(陽性者)	1	1	1
1日平均(件)	16.8	20.0	19.4

この季節は毎年、身の引き締まる思いです。9月の合同研修を受けての部門研修で、新しいパワーを感じるからです。ホットラインはふれいす東京の各部門の中でも、研修の期間が長い

のですが、今年から更に研修内容を見直し、中味を濃く致しました。研修生の必死な姿には、担当スタッフも感動を覚えずにはいられません。一日も早くホットラインのスタッフの一員になって頂けることを願っています。7~9月に相談件数が減少傾向にありましたが、「東京都予防月間」と「世界エイズデー」「日本エイズ学会」等の影響から、件数的に回復しています。

11月~12月は、検査関係の相談が40%以上に跳ね上がっています。(報告:佐藤)

ぷ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

★ミーティング・その他活動 () 内はぷ☆PEP参加人数

- ・日本エイズ学会ユース部門 全体ミーティング 10/25
 ピア部 (「学校の中のピアエデュケーション」関連)
 10/6 (2名)、11/7 (3名)、11/11 (3名)、
 11/14 (3名)、11/20 (3名)、11/22 (2名)、
 11/23 (2名)、11/28 (3名)
 - ・勉強会 10/2 (3名)
 - ・日本エイズ学会参加 3名
- (ぷ☆PEP活動報告:じっつー)

★エイズ学会ユース部門参加者メンバーより

一番の収穫はなんと言っても感謝の気持ち。多くの人に支えられて活動出来る事の素晴らしさを実感! みんなの魂こもったハンドバッグ、改訂版に乞う御期待! (ユース部門ピア部:かよこ)

学会を通じて、「学校でのピアエデュケーション」が、私にとっていちばんやりたいことだったと再認識できたことが大きかった! 他団体のユースと一緒に参加できたこともあって、活動の幅の広がりや、エデュケーターが伝えたいメッセージの多様性という点で、たくさんのことを学びました。時間的にも体力的にもきつかったけど、最後まで関わってほんとによかった。

(ユース部門ピア部:じっつー)

「オールナイトな“Handbag”とパワーポイント」

ぷ☆PEPからのエイズ学会参加者にとっては、学会発表当日までの日々は、本当にエキサイティングかつスリリング、そして濃密な時間となりました。

まず、ピアエデュケーションを行っている個人や団体の方々に協力して頂いてインタビューを10月から11月初めにかけて行いました。「ピアエデュケーションを行う際の学校との交渉」という点を中心テーマとして、今活動しているエデュケーター達の「活動内容」「置かれている立場」「率直な思い」「対象者への配慮」等の「生の声」を集めることが出来ました。その結果を基に、同様な悩みや困難を経験している/するかもしれないピアエデュケーター達の問題解決のヒントになればと思い、『事例集兼ハンドブッカーpeer education Handbag』を作成しました (Handbagは、つづりを間違えちゃったのではないんです。エデュケーター達の思いや意見、アイデアが詰まっている“Bag”のようなものと考え、更にHandbagのように「持ち歩いてもらいたい!」という思いも込められています。)。ハンドブックの最後には、学校との交渉の際に使えるよう、確認事項のための「チェックリスト」も付録として付けました。

このハンドブックおよび当日のプレゼンテーションのパワーポイント作成は、ユースプロジェクトチーム・ピア部メンバー間の固い結束と厚い信頼、そしてユースならではの(?)の締め切りを“超越”したオールナイトな作業の“成果”であることも付け加えさせていただきます。

学会当日もたくさんの方に発表を聞いて頂き、200部用意したハンドブックもメンバーの手元にすら残らないほど、皆さんに持って帰って頂きました。

ぶ☆PEPを通して、他団体の多くのメンバーとかけがえのない信頼関係と思い出を築けたこと、そして、ハンドブックの作成および学会発表に至るまでに多くの関係者の方達から、語り尽くせない程の心温かい御協力と御助言を頂きましたこと、ただただ全てのことへ感謝の気持ちで一杯です!〇×〇×!更にうれしいことに、ハンドブックに関しては、新たに問い合わせを頂いている様です。2月以降から、改訂および増刷の作業に入りたいと思っています。

(ユース部門全体報告：JUN)

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00～ 第3木曜 18:30～)

10/5	3人	10/19	5人
11/2	4人	11/16	3人
12/7	2人	12/21	4人

◆利用者数

8カ所の病院に通院中、もしくは入院中の20名の方への26名のバディスタッフを派遣

◆活動内容 (2006年12月末現在)

派遣継続中	20件
在宅訪問	13件
病室訪問	3件
在宅の電話のみ	1件
派遣休止	3件

◆10月～12月の派遣調整

新規派遣 1件

◆バディ担当中のスタッフ構成 (12月末現在)

女性 14名 男性 8名

◆バディワークショップ

10月8日(日) 午前10時～午後4時

於 ぶれいす東京事務所

参加者10名、バディ登録者10名、スタッフ3名、協力者1名

◆バディフォローアップトレーニング

11月8日(水) 午後7時30分～午後9時30分

「視覚に障害の持つ人の介助について」

講師：東京都視覚障害者生活支援センター職員 長岡雄二氏

参加者9名

◆バディの現場から

10月8日(日)にバディワークショップを開催し10名が参加、研修を修了し10名がバディ登録を行いました。既に活動している方もいますが、また新たな戦力が加わり、心強く感じています。既に活動頂いてるみなさん、待機のみなさん、みなさんの協力のおかげでバディ派遣が成り立っています。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)(*ファシリテーターなど)	
10月	26日	222名	(20名)	(13名)
11月	24日	252名	(9名)	(4名)
12月	24日	272名	(13名)	(12名)

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆カフェ・ネスト

10月	4回	31名	11月	5回	57名
12月	3回	31名			

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新陽性者 PGM 第30期 (参加者6名) 10/7 10/21 (修了)
- ・新陽性者 PGM 第31期 (参加者6名)
10/15 11/2 11/16 12/7 (修了)
- ・新陽性者 PGM 第32期 (参加者7名) 12/23
- ・陰性パートナー・ミーティング
10/14 (2名) 11/11 (4名) 12/9 (4名)
- ・ミドル・ミーティング
10/14 (9名) 11/11 (8名) 12/9 (8名)
- ・もめんの会 12/22 (4名)

◆学習会/イベント

- ・10/15 Women's Salon 第3回「川名奈央子さんと話そう」
ゲスト：川名奈央子さん(参加者9名)
- ・10/16 ストレス・マネージメント講座2 (参加者4名)
- ・11/13 ストレス・マネージメント講座3 (参加者5名)
- ・12/17 ネスト年末パーティ (参加者28名)

◆ミーティング (陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
10/24 (5、5)
- ・新陽性者 PGMPGM 事前打合せ
10/14 (2、1) 12/16 (2、2)
- ・web NEST 運営委員会
10/17(2、2) 11/14 (2、2) 12/12 (3、2)
- ・ネスト世話人会 12/21 (1、3)

◆ネスト・ニュースレター

10/23 10月号発行、11/17 11月号発行、
12/8 12月号発行

(報告：はらだ)

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

<http://gf.ptokyo.com>

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

10月	8件 (平均2.0件)
11月	13件 (平均3.25件)
12月	9件 (平均2.25件)

◆VOICE07 FINAL 開催準備

2007年1月開催のVOICEに向け、Gフレはその準備に追われる日々でした。Gフレのミーティングに加え、出演者とのミーティングも繰り返し行われ、毎年ご出演いただいている方からは「こんな今までなかったよね」と言われるほど。さらにイベント公式HPの立ち上げ、新宿二丁目でのアウトリーチなどの広報活動を行いました。アウトリーチにはレザーに身を包んだ謎のハードゲイも登場し、PRIに役買っていました。イベントの様子は次号のニュースレターでお伝えします。(報告：サクラ、ノブ)



HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績 2006年10～12月

2006年	10月	11月	12月
電話による相談	65	46	70
対面による相談	42	50	47
E-mailによる相談等	77	89	86
うち新規相談	14	18	18

※メール新規は含まず

◆10～12月の新規相談者の属性 (N=50)

陽性者：38人 (男性：36 女性：2)
判定保留告知：2人 (男性：1 女性：1)
パートナー：5人 (男性：3 女性：2)
家族：3人 (男性：2 女性：1)
友人・知人：2人 (男性：1 女性：1)

◆10～12月新規相談者の情報源 (N=50)

web：19、知人の陽性者：8、検査所/保健所：4、看護師：4、
電話相談：3、医師：3、知人からの紹介：2、パートナー：1、
印刷物：1、MSW：1、カウンセラー：1、不明：3

◆10～12月の新規相談内容

[検査と告知]

- ・在宅検査キットで陽性だった。保健所で確認した。
- ・保健所で陽性告知。初回通院に保健所の人がつきそうことに戸惑う。
- ・迅速検査にて判定保留、確認検査で陽性。病院に行きたいが経済的に無理。
- ・皮膚症状があり、地方の公立病院で感染がわかった。
- ・駅前でやっていた迅速検査で判明、保健所で確認中。
- ・一昨日、保健所の検査でわかった。漢方で治したい。

[周囲の人間関係]

- ・陽性が判明後、感染の可能性のある人には告知。トラブルになりそう。
- ・パートナーの陽性が判明。相手は地方に離れて暮らしている。
- ・パートナーが献血で陽性だった。自分は陰性だった。
- ・感染がわかった直後。子供や妻への告知のタイミングについて。
- ・感染者のパートナー。情報をつめずぎで、混乱している。
- ・母親。息子から勧められたので、ぶれいす東京に来ました。

[ネットワーク]

- ・PGMに参加したい。
- ・他の陽性者にあってみたい。彼氏がいるが通知はしていない。
- ・留学したいので、国内の情報を知りたい。
- ・海外から帰国。休職中だが、職場に早く復帰したい。
- ・血液製剤で感染。最近、閉塞感を感じていたため、来てみた。
- ・ネット上で知り合った感染者からの紹介で来所。
- ・友達の陽性者からミドルミーティングにさそわれて来所。
- ・アルコールの依存をもっている。他の陽性者と知り合いたい。
- ・ゲイバーのママから、お客のポジティブを紹介したい。
- ・学会に参加した時にネストのことを聞いた。

[医療とコミュニケーション]

- ・友達の感染が判明。医師との関係がうまくいっていない様子。
- ・告知直後、カンジダがでている。病院はどこにいったらいいか。
- ・告知から2年。服薬開始時期になったので不安になった。
- ・海外にて夫の感染が判明。国内の医療機関の情報を知りたい。
- ・通院している病院はHIV陽性者が少ないらしく不安。
- ・ストレスがたまり、仕事に影響がでている。
- ・服薬開始2週間で副作用が出現した。
- ・入院中にHIVの検査も受け、感染が判明。転院することに。

[セーフアセックス]

- ・彼氏とのセックスで、予防に失敗してしまった。

[福祉や生活]

- ・妻は外国人。国内での治療費はいくら。
- ・最近、海外から帰国した。国内のサービスは。
- ・住宅を購入したいと思っている。生命保険について知りたい。
- ・健康保険のプライバシー管理について聞きたい。
- ・職場の団体信用保険の情報の流れを知りたい。

(報告：牧原/福原/生島)

研究部門

厚生労働省 厚生労働科学研究

◆「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」(2006年度から)

大阪府立大学の東優子さんが主任研究者となって今年度より開始された研究で、池上と生島が参加しています。小学館と共同にて、同社の雑誌「週刊ポスト」の男性読者を対象に、「性娯楽施設・産業を利用する男性に関する研究」に関するアンケート調査を行い、2千通以上の回答を得ました。調査の概要・速報は12月22日付「週刊ポスト」に掲載されましたが、今後より詳細な分析結果を、研究班の成果としてまとめていく予定です。

(財)エイズ予防財団 研究成果発表会

◆「Living Together～予防とケアの融合～」

昨年度まで3年間継続した、池上を主任研究者とする厚生労働科学研究「HIV感染予防対策の効果に関する研究」の成果「HIV陽性者は予防とケアを繋ぐ存在」、またそこから導かれたメッセージ「Living Together - HIVを持っている人も、そうじゃない人も、もういっしょに生きている」について、一般青少年を主なターゲットにした発表会を行いました。

11月30日～12月2日の3日間、都内で行われた「第20回日本エイズ学会 学術集会」に日時・開催場所を合わせ、千代田区の学術総合センター内ホールにおいて、12月2日(土)夕刻に、研究発表の他、陽性者の書いた手記の朗読と音楽のパフォーマンスの発表を行いました。

合計130名以上の来場者に「Living Together」のメッセージを伝える機会を得、来場者アンケートにおいても好評を戴きました(関連記事はP.6)。

(報告：吉田)

■ 編集後記 ■

- ・最近、マヤ暦をベースにした13の月の暦というカレンダーを使い始めました。自然のリズムに合わせているということで1ヶ月=28日。毎月が2月です！(笑)…(こんどう)
- ・暖冬のせい早くも梅の花を見ました。そういえば今年は豆まきも忘れてひたすら原稿の催促をしていたような(汗)(やじま)
- ・春が近づいてきました。今年のお花見の開催時期はホント読めません。3月になりましたらホームページにてお知らせしますのでチェックしてください。(いくしま)

編集・発行：特定非営利活動法人 ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL：03-3361-8964 (月～金 12:00～19:00)

FAX：03-3361-8835

E-mail：info@ptokyo.com

ぶれいす東京HP：http://www.ptokyo.com/

Gay Friends for AIDS：http://gf.ptokyo.com/

web NEST：http://web-nest.ptokyo.com/

Sexual Health：http://shw.ptokyo.com